子どもたちの
あり余る元気をもらって
脚本が輝き始めました。

脚本家、大石三知子さんにきく 映画『楽隊のうさぎ』のつくりかた

――『楽隊のうさぎ』との出会いはいつくらいからになりますか？

2010年2月に鈴木卓爾監督の『ゲゲゲの女房』の深谷での撮影に向かう途中、プロデューサーの越川道夫さんとなんとなくの流れで、もし『楽隊のうさぎ』を映画化するとしたら子どもの映画になっていくのか、音楽の映画にしたほうがいいのかなどのお話をしたのがはじまりだと思います。それ以来、この小説の映画化が気になりはじめました。

――大石さんご自身は中学生時代、吹奏楽部だったんですか？

いえ、私はその頃、美術のほうに進んでいきたいなと思っていたんです。吹奏楽部のいる3階を見上げて何かキラキラしているなとは思っていました。

――具体的に映画にすると聞いて、この小説をどのように脚本にまとめていこうと思いましたか？

脚本家としていつも思うのですが、〝得体のしれない小説〟のほうがやりがいのある仕事になると思っています。今回はまず原作に忠実に、家族や学校でのエピソードも書き込んでいきました。主人公の克久が、成長とともに母親の存在がだんだんウザったくなっていく一方で未踏の吹奏楽の世界に入り込んでいくというところに力点をおいて書きましたが、次第に吹奏楽の世界を中心に描いていくように整理していきました。

――小説に登場するうさぎをどう見せるのかが脚本家の腕のみせどころだと思いますが？

小説を改めて読んだときにどうしようと悩みましたが、監督からかぶりもので人間に演じさせるとプランを聞いて、克久を吹奏楽部に招き入れるうさぎを書き込んでいきました。

――もうひとつの腕のみせどころが、入学したばかりの中学生が定期演奏会の舞台に立つまでの過程をどう描くかですね？

浜松でオーディションをしたんですね。このオーディションで中学生たちと出会った時、映画『楽隊のうさぎ』が本当にスタートした瞬間だと感じました。吹奏楽部のメンバーが決り、学年も楽器演奏の経験がまちまちの部員の個性に合わせた脚本に変えていきました。原作にあるセリフを一番似合いそうな部員に割り振ることもありましたが、中学生の言葉もすくいました。例えば、「コンクールのメンバーに落ちた友だちに自分だったらなんて言って励ますのか？」などの質問を投げかけ出てきた言葉を脚本に反映させたりしました。

――「吹奏楽部って楽しいの？」っていう言葉が原作にありますが。

実際に中学生を集めてひとつの吹奏楽部を作っていくという過程と、克久たち中学生が実際に成長していく時間を描く映画になりました。ドキュメンタリーでもなければ脚本のまま撮った映画でもない。一生のうちでも、身も心もぐんぐん成長する中学生と一緒に私たち作り手もさまざまな発見があったし、成長させられました。脚本が子どもたちの元気に巻き込まれないとできなかった映画ですし、自分の中学時代の気持ちをよみがえらせ、かさね合わせることもあり、この先、もう二度とないだろう経験をさせてもらいました。

聞き手●北條誠人（ユーロスペース）

大石三知子（おおいし・みちこ）｜1965年東京生まれ。東京芸術大学美術学部卒業後、会社勤務を経て、同大学院修士課程映像研究科映画専攻脚本領域入学。田中陽造氏に師事し2007年に卒業。映画『東南角部屋二階の女』（池田千尋監督 2008年）で脚本家デビュー。鈴木卓爾監督とは映画『ゲゲゲの女房』（2010年）に続き、本作が2作目となる。

浜松のミニシアター
「シネマイーラ」をお訪ねし、
館主の榎本雅之さんに
お話をお聞きしました。

『楽隊のうさぎ』
エクゼクティブ・プロデューサー
榎本雅之さん（60歳）

――設立の経緯は？

ここは元々、浜松東映という東映系の映画館だったんですよ。僕も、かつては東映の社員としてここの支配人をしていました。最初に赴任してきたのは1989年。そのとき、他の劇場と同じことをしていたんじゃだめだと思って、夜8時台からアート系の映画を上映し始めたんです。それが浜松の映画ファンに支えられて、定着しました。その後、2008年に東映としては劇場を閉めるという話になって、それなら僕が自分でやってみようと。アート系のお客さんも劇場に付いているし、配給会社とのつながりもある。ちょうどその頃、シネマシンジケートが設立されようとしていて、そういうミニシアターの連携があるのも面白そうだなと思って、東映を退職して、2008年12月にオープンしました。

――始めてみて、いかがでしたか？

最初のうちは、とにかくお客が入らなくて、これは大変なことになったと（笑）。浜松は駅の近くにシネコンがあるから、ある程度ヒットが見込めるアート系の映画は、そちらに出ていたんですね。でも続けていく中で、うちに出してくれる配給会社も増えてきたし、一方でシネコンはライブ・ビューイングや3Dの映画が多くなったのでアート系にそれほど手を出さなくなった。それで今は、なんとか成立しています。とはいえ、デジタル映写機の導入で経費がかかったし、東映時代から使っている冷暖房設備も古くなってきた。安心できる状況とは言えないですね。

――そんな中、『楽隊のうさぎ』の製作をなさいました。

ある日、静岡出身の越川道夫プロデューサーから、中沢けいさんの「楽隊のうさぎ」を、浜松で映画化したい。監督は、やはり静岡出身の鈴木卓爾で、という話があったんです。2010年に、函館の映画館・シネマアイリスが中心になって製作して、シンジケートが配給協力した『海炭市叙景』という映画があったでしょ。あの作品のように地方で作られて、全国の映画館で公開されていく映画を、浜松でも作れないかと思っていたところだったので、資金を集めて、製作したんです。

――完成した今、どんな心境ですか？

イマジカで初号試写をみたときは、ついに出来た、映画になったんだと思って、涙が止まらなかったね。特に、オーディションで選んだ子どもたちが、しっかり成長して、存在感を持って映っていたのが嬉しかった。あとは、とにかく一人でも多くの人に見てほしい。映画は、お客さんに見てもらって、はじめて完成するんです。全国の映画ファンの皆さん、よろしくお願いします!!

ところで、「イーラ」って何だか分かりますか？ 遠州地方で、肯定の意味として使われる言葉なんだそうです。「映画、行こうよ」「いーら!」

聞き手●平野勇治（名古屋シネマテーク）

榎本支配人イチ押し、浜松の名店！

「総本家 みその」

浜松のシネマイーラに行った時に、ぜひ立ち寄ってみたいのが昭和21年誕生のこの老舗。鰻はもちろん、肉、魚、付け合わせの野菜まで自慢の料理はすべて静岡の地ものばかり。地産地消に取り組んで、本当に美味しい食材を吟味した、丸ごと浜松を味わえるお店です。

住所:浜松市中区田町323-7
tell:053-413-0223
営業時間:17:00-22:00
月曜定休
www.misono-g.com/

相談募集中！

お坊さんの人生相談

【質問】

映画が大好きな30代（男）です。最近思うのですが、映画を見ていると次々に美しい女の人が出てきて、それをまた次々に好きになっている自分がいて、これではいつまで経っても煩悩まみれの人生が続くばかりです。映画を見ている限り、煩悩から脱せられないのでしょうか？

【お答】

煩悩は、108つ有ります。その中で『貪（トン）―むさぼり』『瞋（ジン）―いかり』『痴（チ）―おろか』の三つが元になっています。思い当りませんか？ 結論を言いましょう。浄土門ではこの世では煩悩を断ずることは不可能と説いています。往生浄土を願い、毎日『明るく』『正しく』『仲良く』生活をして極楽に生まれ、そこで修行をして仏の位に付くのです。煩悩まみれと自覚できていれば、何も問題ありません。貴方にはもうシネマディクトの症状が現れています。映画に『惚れた』私達は、映画を観すぎて世間的に、白い目で観られても本望なのです。
そんな貴方にお勧めの一本『フォロー・ミー』（キャロル・リード監督）

文=宮嵜善文｜1961年生まれ、長野県出身　浄土宗・見性寺副住職
NPO法人コミュニティシネマ松本CINEMAセレクト 理事長